

## 白杖を傍らに直耕す愛媛の地：村田邦夫先生

大石 高志

村田先生は、1993年から約25年間、神戸市外国語大学で教鞭をとられ、2018年3月をもって退官された。ここ数年は、目を不自由にされ、厳密な意味での定年を1年待たずに、大学を去られたことになる。

私が外大に着任したのは2002年であるから、それ以前の約10年間の村田先生については間接的にしか知る由がないが、昨年度までの約15年間は、同僚教員として、大変御世話になった。こうした経緯から、今回、僭越ながら、先生を送る言葉を小文として記させていただく。ただし、以下は、言うまでもなく、私が見て受け止めた限りの、ある意味で、不可避免的に極めて偏った1つの「理解」に過ぎない。

\* \* \*

村田先生について、強烈な印象を私の中に残しているのは、何よりも、中国に在外研修(2003年度)で1年ほど滞在された後に帰国され、久しぶりに外大構内でお会いした際に、めっきり御痩せになり、頬も少々こけた様子でおられた時の容姿の激変ぶりである。そして、その御変化は、容姿にとどまらず、言動にも生じておられ、顕著に自重気味で、何らかの内的な葛藤のようなものを抱えておられるのかと、傍から見えるようになった。そして、何よりも、外大での授業やゼミを連続2日間程度に集中されて、ご実家のある愛媛にほぼ毎週、帰宅された。そのため、現に、大学で御姿を見る回数がめっきり減ったのである。その1年前までの村田先生がどのようなであったかを明確に形容することは、記憶が薄れてしまい、今となっては難しいのだが、ジャケットやスーツを着崩して羽織っておられても、大柄な背丈と広い肩幅から、全体として、妙に精悍で堂々とした印象を醸し出しておられたと思う。御言動も直裁的な面が印象的で、非常に快活なイメージを喚起しておられた。兎に角、1年間での変貌は大きかった。実際、当時、年配の教員の方のなかには、村田先生と同じ学科に所属する私に対して、「村田は変わったね。痩せたし……。何か病気なんか？」と研究棟のエレベーター内で小声で尋ねてきた方も、複数おられた。私は、そのたびに、「いえ、本当に分かりません。授業も普通にされていますし、御元

気ではあると思いますが・・・」と、何も知らないままにお茶を濁していたのだが、今になって正直に告白すると、当初は、私自身、何か病を宿されたかと疑っていた。

先生御本人と、こうした「変貌」について、明瞭な話を交わしたことは、今の今まで、実はない。だが、当時、少々後になって、先生がご帰国後に出版された1冊の著書を手にとって、その理由と背景について、御自身が示唆的な説明をされていることに気がつき、私の中でではあるが、一定の了解が得られた。その著作とは、『覇権システム下の「民主主義」論：何が英霊を生み出したか』（2005年）である。

同書では、中盤までは、それ以前からの先生の論点、つまり、イギリスをはじめとする西欧の覇権国家においては、歴史上、「民主主義」が実現される際に、「植民地主義」や「帝国主義」を必要とする、必要としてきた」という「史的システムとしての民主主義」論が先行の様々な民主主義論との比較対照のなかで敷衍され、さらに加えて、戦後の国際状況について、「「大国」の、先進国の「民主主義」が、途上国の「開発独裁」の強権体制と呼応しながら、「途上国」の「民主化」や「政治的多元制」を抑圧しているのではないか」という示唆的考察が展開されている。しかし、本書上梓の核心的動機は、後半に配置された「愛媛（伊予）人」の「愛媛（伊予）人」による「愛媛（伊予）人」のための「民主主義」を創造するために」と題された章、および、それに引き続いて収録された「英霊は今も泣いている：死者の申し立て」（前・中・番外）という「小説もどき」（先生御自身の形容）の3つの章に、読者へ直接訴える声明文のようなかたちで、そして時には、モノローグのように、強く打ち出されて明らかになる。

つまり、本書は、「覇権システム」とその「秩序」から抜け出すことのできる「歴史認識」と、それに裏打ちされた「経済発展」と「民主主義」（の在り方）が、どのように確保・実現可能かを、政治学上の問題としてだけではなく、自分自身の問題として問い、その答えを、生まれ育った愛媛県という場に遡及させたいと、これまでのような「日本」と「日本人」とは一線を画した、異なる生き方を志向する「愛媛（伊予）」と「愛媛（伊予）人」を創造していくことに求めた。そして、その愛媛での具体的な実践の主軸が、「自分で耕すことのできる、可能な限り「自給自足」と「地産地消」に近づける田畑のある場所（空間）」を共同体として創生させ、「自由貿易」体制やその背景にある「覇権システム」と向き合うことであると、静かに謳われた。そして実際に、先生は、神戸とは別に実質的に居を保たれていた愛媛で、「伊予・エスニックグループ」という「食」と「農」を考え、実践する」同士の方々と協働的にその試みを実践に移されていた（村田 2005：「あとがき」）。

つまり、中国での在外研修からの帰国後に周囲が眼を見張って感じ取った御容姿を含む変貌は、実は、この「愛媛（伊予）」や「愛媛（伊予）人」を創造していく「食」と「農」の実践に関係するところが大きかったのだ、いや、正確に言えば、

少なくとも私はそのように、教示を得た。

目標とされるべきは、トルストイの『イワンのばか』の「イワン」に代表されるような、あるいは安藤昌益が説いたように「直耕」を実践する人です。それはつまり「手のひらにたこ（胼胝）のできた人間であり」、愚直なまでに搾取を拒み、人を育む土とその自然に根ざした人間像です（村田 2005：251-252）。

例えて言えば、それは「武士は食わねど高楊枝」的論理（生き方）である。・・・いわば「知足」の精神を、当然のこととする論理（生き方）である（同上書：306）。

半分意識的に身を躰（やつ）したかのように見える御容姿と、自問し悩みながら試行錯誤を繰り返すような御言動は、その後、御退官まで変わることなく続いた、いや、傍から見る限りにおいて、より明確なものとなっていった。その契機と背景が、2003年度、そして再度、2013年度に先生が機会を得られた中国での2回の在外研修と、そのなかで向き合うことになった政治状況や個人的経験だったのだ。

このあたりの経緯は、前掲『覇権システム下の「民主主義」論：何が英霊を生み出したか』（2005年）や『21世紀の「日本」と「日本人」と「普遍主義」』（2014年）のなかに、ほぼ全編にわたって、極めて印象的に織り込まれている。振り返れば、その10年間ほどは、日本と中国とを取り巻いて非常に多難な政治状況が続き、あらためて、歴史をどのように受け止めるか、厳しく問われることになっていた。つまり、都知事に就任して言動の影響力を強めながら「中国と中国人を今でも公然と蔑視する」石原慎太郎氏の存在、小泉首相も含めて強行されていた靖国神社参拝問題やその関係での「合祀」問題、歴史認識における「自由主義史観」の台頭や「新しい歴史教科書」の問題、集団自衛権や改憲の問題、尖閣諸島問題などなど…。これらの問題が、一般的な政治状況としてのみならず、中国に身を置き、日々、大学で顔を突き合わせる中国の学生や教員、そして市井の人々との間において、自身がその一部であるところの生身の関係性の問題として、否応もなく、立ち現れた…。

実際、2004年から御退官の2017年までの間に先生が上梓された全ての著作は、こうした問題に対峙しながら、何らかの答えを紡ぎ出そうとする葛藤の営為であったとも言えるのではないだろうか。

\*                     \*                     \*

それでは、何故、愛媛だったのか。「覇権システム」とその「秩序」から抜け出すことのできる「歴史認識」と、それに裏打ちされた「経済発展」と「民主主義」

(の在り方)」を、「これまでのような「日本」と「日本人」とは一線を画した、異なる生き方を志向」しながら、模索・実践していく場が、何故、愛媛に設定されたのか。

上述のように、実際、先生は、長い間、外大での授業やゼミを2日間ほどに固めておられ、週の内、半分は、郷里の愛媛で過ごされていた。だが、こうした実生活のこののみが、愛媛への遡及・帰着を促していたわけではなかろう。むしろ、愛媛が、近現代に有してきた固有の政治性が、大きく先生を突き動かしていた。

「自由主義史観」とも少なからず共鳴的關係を有することになっていた司馬遼太郎の長編小説『坂の上の雲』(1968-72年)で、主人公として描出されていた秋山兄弟(兄の好古は陸軍、弟の真之は海軍で、指揮や作戦立案に当たった)は松山出身であり、日露戦争などで「飛躍」を見せた近代日本の軍事力あるいは「国家力」の源泉の1つとして、こうした人物の事績を賞賛するような風潮や言説が生み出されつつあった。このことは、中国に身を置いていた先生に、ことさら、大きな意味を投げかけた。

私が生まれ育った愛媛県は、「新しい歴史教科書」を採択した数少ない県の1つではなかったか。……これを中国の政治家はどう見ていたのだろうか。北京の人はどう感じていただろう。たしか「坂の上の雲」記念館などというものを建設することになっていた。司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』の秋山兄弟が松山出身であることに因んで……侵略戦争とアジア諸国への加害の歴史のことには触れずに、日露戦争の勝利だけを讃美する記念館、……近い将来、韓国と北朝鮮が「統一」して、そこから多くの観光客が愛媛を訪れるとき、私たちは彼らに対して、どのような「歴史教育」に裏打ちされた「愛媛の物語」を語るだろうか。中国はこれからますます大きな経済力を手にして、彼らも観光に愛媛を訪れるだろう。彼らはどのような反応を示すのだろうか(村田2005: 235-236)。

さらに、中国での在外研修中の日常生活のなかで、はからずも、生身の先生を、「歴史」が「急襲」することがあった。

筆者の脳裏をよぎるのは十年前の長春でのでき事である。「お前は日本人か、タクシーから降りろ」そう言われたのだ。初めての経験でありショックであった。未だに侵略戦争の傷跡は消えないし消せないままであり、今も戦争は終わっていない、と言わざるをえない。今回(2013年9月の初め頃)も、ここ保定でタクシーから降りろと言われてしまった。この保定は四国の愛媛で生まれた筆者とは因縁の深いところである。何しろ愛媛県の新居浜市にある住友別子銅



う立場であり、結果として、先生よりも、「楽観的」な歴史認識を持ち合わせることになっているとも言える。実際、外国人を含む院生にも、無意識に、そうした歴史的側面の探求を焚き付けてきたようにも感じる。もしかしたら、先生も、こうした点について、看取り意識されていたかもしれないが、今となっては、あらためて確かめるのも気が引ける…。しかし、いずれにせよ、村田先生と私との間の立場や論点の一次的な「違い」は、両者と毎週のように向き合う院生の皆さんのなかでは、「困惑」や「齟齬」ではなく、少し深いところで、ある種の「均衡」を生み出していたのではと、まさしく「楽観的」に振り返っている。

\*                     \*                     \*

冒頭にも記したが、先生は、近年、眼を不自由にされて、1年早期に外大を退職された。休職中であった2017年度からは、愛媛に定住され、盲学校で様々な訓練を受けておられる。こうしたなか、先生の思索と研究に、いまや、もう1つの軸が加わった。2018年2月に行なわれた最終講義は、「「白杖」に伝わる人の「優しさ」と「残酷さ」—「差別と排除の関係史」考」と題されたものであったが、当日に配布されたレジメから、以下、一部を引用しておく。

白杖を手には歩行訓練をした際に感じる差別と排除の関係からつくられてきた「道」→健常者も障害者も歩く道なのに、健常者が中心となり建設されてきた道。それは国家の建設においても同じ。多数派を構成する民族が中心となり、少数派の民族を差別、排除しながら国家建設の道がつくられてきた。国際社会も同じ仕組み。先進国も途上国も等しく国際社会を構成しているのに、先進国、もしくは「文明」が中心となってつくられてきた道→近代化のたどる道は、すべての構成員が一堂に会してつくられなかった。

白杖を傍らに携えて、今後も末永く、愛媛で、大地や社会的紐帯を耕し、力強い発信を続けていただければと、影からながら、お祈り申し上げる次第である。

### 参考文献

- 村田邦夫(2005)『覇権システム下の「民主主義」論 —何が英霊を生み出したか—』。東京：御茶ノ水書房。
- 村田邦夫(2014)『21世紀の「日本」と「日本人」と「普遍主義」—「平和な民主主義」社会の実現のために「勝ち続けなきゃならない」世界とそこでの戦争—』。京都：晃洋書房。